

コラム 子どもの言葉 その1 (その子のよさを共有しよう)

## 「汚なねえて、オレがちゃんと風呂に入れたるわー！」

野球部の部室の脇に捨て猫が2匹。生まれて間もないと見えて、目は開いているものの、よたよた歩きの状態。朝部活をやっていた生徒たちが見つけて、早速、保健室へ(というところが面白い)。一匹は白、もう一匹はグレイ。どちらもなかなか品のある顔立ちをしていました。噂はすぐに広まり、始業前の保健室は千客万来です。「始まるよ、早く教室へ行きなさい。」と言わなければならないのが、悲しいかな教師の業です。

それでも休み時間ごとに、保健室は猫好き、及び猫を捨ててはおけない少年・少女たちで賑わいました。「誰か飼ってくれる人、おらへん？」と、飼い主募集の声も飛んでいます。今のご時世、猫一匹を引き取る余裕のない家庭ばかりで、結局は「猫を拾ってきてしまった」心優しい生徒のクラスで何とかするはめになりました(引き取り手がなければ保健所へ、という選択も担任によって提示されています)。放課後、すったもんだの挙げ句、KさんとD君が「一泊だけ」という限定付きで、猫を引き取ることになりました。

さて、その翌日。KさんもD君も案の定、家では飼うことを拒否され、しぶしぶ再び猫を伴って登校しました。保健室へ持っていけば、また騒動のネタになるので、その日はとりあえず教室へ置いておくことになりました。

給食時間になりました。担任は、生徒たちに呼びかけました。「猫をさわった手で、給食を食べたらいかんよー！万が一、それが原因で病気にでもなったら、調理員さんたちをはじめ、たくさんの人に迷惑がかかるでねー」と。その瞬間、さっと猫から手を引く生徒もいました。と、同時にD君が怒鳴りました。

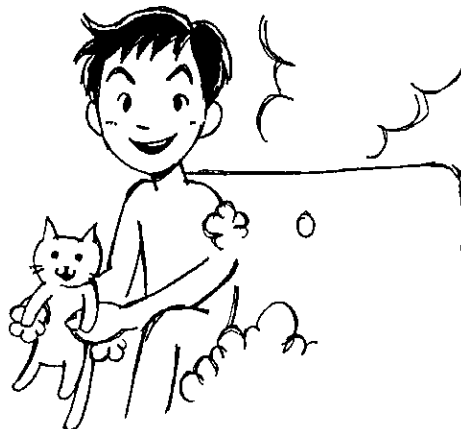
「汚なねえて、オレがゆうべ、ちゃんと風呂に入れたわー！！」

みんなが呆気にとられた一瞬の間、教室は大爆笑！ D君は粗暴なところや我がままなところがあつて、仲間に対して暴力を振るったり、授業に遅れてきたりといった問題行動も度々ある生徒でした。しかし、彼のこうした優しさを理解している仲間が多いのか、特に女の子たちは普段の彼の問題行動にもこまめに声をかけています。そんな中で、彼の問題行動も徐々に減りつつあります。

一方、この日、担任は昼休みに職員室に戻るや否や、大笑いしながらこの素敵なD君の発言を、回りの職員に語ります。「へえーっ、D君、意外と優しいんやねえ」「笑える話でいいねえ」「今度、顔見たら誉めたらなあかんなあ」「一緒に、風呂、入ったんやろか」などなど、一時、職員室が盛り上がります。

子どもの一言を素敵だと思えること、そしてそれを回りの大人たちが知り、よさの認識を共有できることは、子どもにとり居心地の良い社会をつくる上で大切なことではないでしょうか。

(余談ですが猫は無事、引き取り手が現われ、めでたしめでたしの結末でした。)



## 「僕、先に行って聞いてくるわ」

ある冬の夕暮れ。卒業生のKさんが、職員室に「先生、先生！ちょっと来て！」と飛び込んできました。何事かと慌てて外に出てみると、校門の所に小柄なおばあさんが一人。Kさん曰く、高校の帰り道に、そのおばあさんが困ってうろろろしていたようなので、自転車を止めて「どうしたんですか？」と聞くと、反対に「ここはどこやね？」と尋ねられ、途方に暮れたとのこと。たまたま近くを通りかかった1年生のN君とS君も何をしていいのか分からんけど・・・という風情で側に突っ立っていました。

改めて、おばあさんに「どうされましたか？」と尋ねると、「ここは徳島の〇〇橋かね？」「私はどこにいるのか、分からんようになってしまったがね・・・」という答えでした。そうして不安そうに辺りをキョロキョロと見回しています。一緒に職員室を出たY先生共々、はたと困りました。しばらく、おばあさんに名前や思い出せることはないかなど、あれこれ話しかけていたものの埒があきません。交番に届けるにしても、捜索願が出ていなければやっぱり探しようはないだろうし、おばあさんを囲んで「どうしよう、どうしよう」と言う、その間10分ほど。周囲は夕闇が迫ってくるし、道路の真ん中に立っていても仕方がないので、Kさんがおばあさんに会った方向へ取りあえず歩いてみることにしました。

N君は、担任の先生に反抗的で、学級を負の方向へ引っ張るムードメーカーになってしまう存在として、生徒指導上の話題に挙がる事の多い生徒でした。そのN君がS君と共にずっと困ったような顔をして、長いこと、その場においてくれたことに対して、「助かったわ、ありがとうね。」とお礼を言いました。本人は一瞬ニヤリとしましたが、問題は何も解決していないので、また元の表情に戻って事態の成り行きを見守っています。周りはずっかり暗くなっていたので「もう、家に帰った方がいいよ。後は何とかするから」とも言いましたが、動く様子はありません。

足元のちょっと不安定なおばあさんの手をとって教師二人が、そしてその横にKさん、さらに少し離れた後ろにN君とS君が、おばあさんの歩調に合わせて歩き始めました。おばあさんは「前にもな、こうやって分からんようになってまって・・・」とポツリポツリ話します。

50メートルほど歩いたでしょうか。たまたますれ違った、自転車に乗ったおばさんが「あれっ、この人、〇〇さんとおばあさんやないかしら？」と声をかけて下さいました。「多分、そう思うけど・・・」と言いながら、私達のいるところから200メートルくらい離れた角の家を指さして「ほら、あそこ、あそこ。」と教えて下さいます。それを聞くや否やN君は「ほんなら、僕、先に行って聞いてくる！」と言うなり駆け出していきました。S君も後に続きます。おばあさんと一緒にそちらに向かって歩いていくと、その家の方からS君たちに付き添われて女の人が走ってみえました。おばあさんの娘さんでした。顔を見た途端、おばあさんは相手が分かったらしく、名前を呼び「ああ、よかった、よかった。」と心から安心された様子でした。「本当にお世話になりました。ありがとうございました。」というおばあさんと娘さんからのお礼の言葉を聞き、私達は解散しました。

「少年は社会から必要とされた時に自立する」という言葉があります。学校のみならず、より広い場において自己存在感を感じる、そんな機会をどんどん作っていききたいものです。